

令和 4 年度こども園評価書

園番号

20

園名

高松こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている、C : あまりできていない、D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
キラキラ輝く元気な子	みーつけた！ 「これがいい」 「もっとやりた い」	子どもと一緒に遊ぶ中で、その子なりのこだわりや楽しさに気づく	子どもと一緒に遊びながら、子どもの”ここが面白い”の感じ方、捉え方に気付けるように子どもと同じ視線で遊ぶように意識した。子どもの発する言葉、表情、繰り返し取り組む姿等から、その子の楽しさに気付いてどう援助し、どんな環境を用意するのかを再考していった。子ども一人一人の感じ方や楽しみ方が違ってくることに改めて気づくことができた。気づきをどう活かしていくかを意識して進言していき	A	A	・園の重点目標がはっきりとしているため、まず子どもの姿を見取り、その見取りから子どもとどのように関わっていくのか、環境はどのように設定していくのか、手立てを考えた上で実施して、振り返るとい、PDCAサイクルが出来ている。課題はあつて良い。課題が次につながっていくので、B評価も必要。 ・写真も多く取り入れていく掲示物が以前より増えた。写真があると様子が分かりやすいので、良い方法だと思う。小学校でも掲示板を使った発信をしている。 ・職員間の共通理解や情報の共有は、小学校でも課題。自分の学年だけではなく他の歳児にも目を向けて、協力し合える関係を築けると良い。 ・クラス関係なく先生が声を掛けてくれて、情報共有もできているので、安心して預けられる	・気づきを活かすためには、まずクラス担任間で、子どもの表れを共有し考え合っていく。また子どもの「みてみて！」に応えるだけでなく、「それなあに？」と子どもの思いや姿に興味を示して、子どもの思いを十分くみ取りながら、子どもの”今やりたい、楽しみたい”を実現するために環境の再構成を瞬時に実施出来るような準備をしていきたい ・ドキュメンテーションはかわいい姿だけではなく、子どもが夢中になっていることや、心がワクワクしている様子等、子どもの思いが見えることを意識しながら作成し、発信していく。また、他クラスの日記や保育室の環境を見合せて、アドバイスし合ったり、認め合ったりして、お互いに高め合う関係を築いていく。 ・職員間の共通理解は、会計年度任用職員を含めた話し合いの中で、各クラスの保育の方向性を明確に伝え、なぜこうしていきたいのか、そのために何が必要で、いつまでに到達予定なのか、具体的に示していく
		「みてみて」と言いたくなる機会を増やし、子どものつづやき、表情を受け止め、指導計画に記録し、手だてを考え、自らの保育に生かす	子どもから「みてみて」がどんな時に出るのかを捉え、楽しかった場面や、保育教諭の関わりによって、子どもがどう変わったか等日記に記入し、次の保育の手立てに活かした。楽しかった遊びをドキュメンテーションにしてクラスに掲示すると、遊びの過程が見えやすくなり、楽しかったことや頑張ったことを子どもと振り返ると次の遊びに繋がっていった。今後も見える化を意識した保育の手立てを思考していく	A	A		
		月1回以上学年会議を行い、子どものこだわりから遊びをつなげていく保育・教材・環境を話し合う	フリー保育教諭も含めて子どもの発達を振り返りながら、いま楽しんでいることや、子どもとの関わり方や、環境について考え合い、保育環境を再構成していった。担任間の信頼関係が深まるにつれて、コミュニケーションが回りやすくなった。学年会議はフリー保育教諭を含めて実施し、子どもの姿の共有や今後の見通しを話し合うことができた。職員間の共通理解や保育に対する意識向上に繋がっていく	B	B		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	一人一人の集団生活の違いによる表れを把握し、生活の仕方等視覚支援をしたり、職員間で伝達をし合ったりする	一人一人の発達、家庭環境を考慮しながら、職員間で同じ対応を心掛け、生活の流れが理解できるように写真ボードファイル等を作ったり、ホワイトボード、イラスト等を使って、その子にとって一番良い支援を考えていった。各会議で情報共有を図ったが、子どもや保護者との関わり方に戸惑う職員もいて、周知の難しさがあった。周知の工夫を考えた	B	B	・園児142名中、遅番保育を利用している子が120名ほどいて、子どものいない時間がない園の経営状況の中で、職員間の共通理解のために十分考慮をしながら話し合いを行っていき物理的な難しさがあったと思う。しかし共通理解は大切なことなので、課題解決に向けて取り組んでほしい。 ・家庭では経験できない園ならではの遊びを、工夫して提供している。	必要な情報の共有はできているので、今後も周知が必要な情報と担任と事務室が認識すべき情報を精査する。配慮を必要とする保護者や子どもへの対応はできる限り事務室やクラスリーダーが連携し対応していく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	長時間保育の中で、集中して遊ぶ場と家庭的な雰囲気の中でゆったり過ごす場の遊び方を工夫する	乳児組は一人一人の発達や生活リズムに応じて、静と動の遊びの空間や時間を作っていた。幼児組はクラスの活動の充実を図りながら、自分の好きな遊びをゆつりと楽しむ時間と環境を保障していった。また、遅番保育中の子どものつづやき等をフリー担当とクラス担任間で共有し、子ども理解や次の保育の手掛かりに繋げることができた。今後も職員間の伝達を密にしていきたい	A	A		長い時間、園で生活する子どもたちが安心できる保育環境の準備と、保育教諭間が連携して関わり方を改善していく。特に早番遅番時間にどのように過ごしていたのか、早番遅番対応職員との連携を深め、情報共有していく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもが面白いを見ついたり、気づいたり感じたりするための保育者の援助を工夫する	子どもが”おもしろい”を見つかるきっかけとして、個々の興味を探り、ワクワクするような教材、素材、自然物等の出会わせ方を工夫している。子どもの発見や気付きに共感し、同じことをやってみたり、一緒に考えたりする中で、子ども理解を深めていった。子どもの姿から思いをくみ取ったり、環境に反映させたり、関わり方を工夫したりしていき	A	A	・子どもの健やかな育ちを保障していくのは、園の取り組みだけでは解決できない。子どもが一番愛情を求めている時に、受けることが出来ない家庭が増えていて、小学校でも愛着障害を感じられる子どもの表れが増えている。こういった時代の背景を考えていく必要がある	公開保育や、事後研で子どもの理解を深め、教材研究を継続していく。また子ども達が”ワクワク”すること、ものを保育教諭が理解できるように、子ども達が心ときめくこと、ものに出会った瞬間を捉え、どうしたらワクワクが持続し、楽しさが持続するのか、環境や関わりを考え合っていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	月1回避難訓練や災害・事故、不審者対策を行い子どもが時間や場所に合った避難がわかるように指導する	様々な場面を想定した訓練を実施し、保育教諭が自身の役割を理解しながら行動できた。不審者訓練は警察の方が訓練を参観し、対応方法を学ぶことができた。防災だよりを発行し、保護者に発信することができた。ヒヤリハットは周知はできたが、改善策の共通理解が不足していた。発生した時の状況を確認しながら、改善策を考え合っていく必要がある	A	A	・毎月計画的に訓練を実施していて、特に今年は津波を想定した訓練を実施できたことは良い。低年齢の子ども達にもわかりやすい内容の工夫がある。訓練の経験が子ども達に浸透していけば命を守ることに繋がる。普段繰り返していきることが大きな成果となる。津波で避難するタカラスタンダードとの連携を強化し、いざという時に助けてもらえるように働きかけていくと安心である	訓練は次年度も計画的に実施し、実施後に成果と課題を共有し、次の訓練に活かす。特に津波災害対策は園だけでは強化が難しいので協力を要請する。ヒヤリハットは大きな事故につながる前に改善策を考え合い、周知できるようにしていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食育の日を意識し、給食・おやつのお話を紹介したり、栽培・収穫・クッキング体験をし、給食調理員との交流をしたりして食への興味を高める	野菜を栽培したり、収穫した野菜を食べたりクッキングしたりすることで、食材が身近なものとなった。出汁の試飲では調理員が年長の子ども達と一緒に実施したことで調理員との関わりが深まるきっかけとなり、給食や日々の食事の興味にも繋がっていった。一方で全学年の子ども達が調理員と交流を持つことの難しさや、食育コーナーの工夫が課題となった	A	A		来年度も給食調理員と保育教諭が連携しながら、クッキングや季節に合った食育体験を計画していく。栽培は異年齢の関わりを取り入れ、乳児組も体験できるようにしていく。保護者の要望を考慮したり、季節感を発信できるような食育コーナーの改善も実施していく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	月1回のピーターパン会議(ケース会議)でサポートプランの検討をし、全職員の情報共有を図る	特別支援担当職員が各月にピーターパンの会、ピーターパン会議と高松ネットワークサロンを年2回実施。ペアレントメンターさんと園の保護者が交流を持ち、参加した職員の学びに繋がったが、実施した後の振り返りを職員間で共有することができなかった。特別支援担当職員から加配児に関する情報をクラスリーダーやフリー担当に発信し、園全体の共通理解に繋がりたい	B	A	・特別支援教育は十分力を入れていて、高松ネットワークサロンの成果が大きいので、これからもさらに等との連携を継続していきほしい。保護者の育児に対する姿勢が大きく変化していて、小学校でも問題となっている。愛情不足の子どもの多いので家庭支援は大きな課題である	ピーターパン会議や会については、月の行事に位置づけして企画書を作成し、また事後報告を行って、共通理解に繋げる。ネットワークサロンは学びが多いので継続し、研修の一つとしてより多くの保育教諭、保護者が参加できるような体制づくりをしていく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	担当業務分掌を各自意識し、企画提案、計画に基づいた遂行、職員会議で進捗状況の報告を行う	分掌のリーダーが中心となって、年間計画をもとに企画運営することが出来た。分掌からの発信を受けて、さまざま企画の進行を各クラスで見通しをもって準備を進めることができた。職員会議で進捗状況を共有し合った際に、分掌によって業務の滞りや、課題が見えたが改善できなかった。分掌にとらわれずにもっと業務の協力をし合うことが必要である	B	B	・組織体制の充実は、コロナ禍もあり進めにくさがあったように感じられる。各分掌がそれぞれ忙しさを抱え、連携の難しさもあるが協力し合うことが大切。職員一人一人が広い視野を持って業務を進められるようにしていってほしい	すべての分掌が、会計年度任用職員との連携を深め計画的に業務を進めていく。また、分掌にとらわれすぎない連携も必要なため、協力を促す発信と、周囲の状況を把握する受信を一人一人が意識していく
6 研修	(1)研修体制の充実	研修拠点園として公開保育を行い、遊び改善構想の手だてや公開保育の視点について協議する。園内研修では、自分の意見をもって参加し、発言をする。	園内研修を会計年度任用職員も参加するようにしたことで、共通理解が深まった。小グループでの話し合いを行うなかで、若手職員や会計年度任用職員も言いやすい雰囲気作りができ、学び合いや、伝え合いができるようになった。これからは職員のスキルアップに繋がるための研修方法を検討していきたい	A	A		会計年度任用職員が参加できる研修体制を継続し、公開保育以外の学びの機会も工夫し園全体の保育力の向上に努める。駿河区の拠点園研修園として、近隣の園との交流の場がもてるように連携を深めていく
7 教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境の充実	「これがやりたい」という子どもの想いやこだわりに気づき、それを実現できるような教材・用具を準備したり再構成したりする	子どもの想いに寄り添い、今何を楽しんでいるのか、どこに興味関心を寄せているのかを見取り、それぞれのこだわりを大切にしながら関わってきた。より楽しくなるように一人一人の想いが実現できるように適切な素材や道具を探し、タイミングを図りながら準備をしていった。一人一人の”今”を大切に環境の再構成を続けていきたい	A	A	・研修体制の充実では、今後も駿河区の拠点園として研修に取り組み、保育の質の向上を高めるだけでなく、小学校と連携して架け橋プログラムの実施を進めていきたい。宮竹小学校と静岡南中学校は次年度からコミュニティースクールを始める。特に防災、特別支援教育、地域連携の強化と一緒に進めていくが、基本を押さえながら必要なことを選択し、無理なく持続できる体制を目指している。こども園ともそのように進めていきたい ・玄関ホールの掲示板に毎日情報発信をしていて、保護者にとっては嬉しいが、掲示板の位置がもう少し見やすいといい。お散歩マップをもっと活用してほしい	子どもの思いやこだわりに気付くことはできたが、それを遊びや環境に繋げることが難しかった。子どもの写真から思いを読み取ったり、環境を見合ったりして、様々な保育観を認め合いながら共に手立てを考え合う職員の関係作りをしていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	毎日ボードや連絡帳で子ども達の遊びの様子を情報発信したり、降園時子どもの様子を伝え、保護者と子どもの育ちを共有する	玄関のボードやクラスだより等を各クラスで写真を取り入れながら工夫し、保護者に発信できた。また登降園時に具体的なエピソードや成長を感じられた場面を保護者に伝えることで、家庭との情報共有や連携を意識できた。コロナ禍で保護者懇談会が実施できなかったため、今後保護者のニーズにどう応えていくか、工夫する必要がある	A	A		コロナ禍の中でも、安全に配慮してできることを考え合い、懇談会や親子参加会を実施する。保護者に園の教育方針や、行事等のねらいが伝わるように工夫しながら行事や食育などの活動をドキュメンテーションで保護者に発信し、安心に繋げる
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣小学校に園だよりを届けたり、学校だよりを園内で回覧し学校の様子を学ぶ	小学校に興味をもてるように散歩の途中で近隣の小学校に寄り寄り、年長組は同じ小学校に入塾する子を知らせたり、就学に期待がもてる関わりを行った。公開保育に宮竹小の教諭が参加したり、園の職員が小学校の見学に行ったり、園だよりを毎月届けたりして、交流をもつことができた。コロナ禍の中でも連携する方法を考えていきたい	B	B	・高松こども園をとり巻く地域は住宅地で、人の出入りが大きく、住人の傾向が様々なため、地域連携がとりにくい地域と言われている。保護者や地域の人が安心して子育てがしやすいと感じられる町になっていくことを目指していきたい。お散歩マップはあがる地域にも目を向けていってほしい	小学校と連携して、架け橋プログラムを具体的に進めていく。また就学に向けて必要な経験を知り、園生活に取り入れられるように、小学校の公開授業や園の公開保育に参加し合う機会を増やしていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	散歩マップに子どもが遊ぶ様子の写真を掲示し、地域に親しみがもてるようにしたり、地域の良さを伝えたりする	継続して園外保育を実施したことで、子ども達が行った先の良さを実感したり、目的をもって出かけ、遊びこむ楽しさを経験したりできた。すまいるさん訪問も昨年よりは回数が増え、交流を図ることができた。散歩先で出会ったもの、子どもの絵を散歩マップに活用したり、遊びの経過を掲示したりして地域への関心や親しみに繋がりたい	B	B		子ども達が地域で様々な経験をしていけるように園外保育を多く取り入れる。散歩マップは保護者から情報を得たり、どのクラスが行ってどんな楽しさを見つけてきたのか、わかりやすく明記して、保護者や子どもたちが親しみが持てるマップを分掌が中心となって作成し、発信していく